

出版される計画があるようである。世界の学界のため一日も速かに実現されることを切望するものである。

第七章は軍機大臣と皇帝の關係を論じ、且つ軍機大臣が皇帝の特使として地方に派遣された実例を列挙し、さらに軍機大臣の権力の重い原因を究明する。そして第八章は軍機処の作用と価値とを述べ、これが清代の中央集権的専制君主政治において極めて有効な機関であったことを力説する。

最後に参考書目として、本書に利用された多くの文献の名が、各箱の番号を明示した軍機処檔案以下列挙されている。

ただその中、大清太祖高皇帝実録から徳宗景皇帝実録に至るまでの歴代実録をいづれも殿刻本と記しているが、実録に版本のないことは今更言うまでもないところである。また宣統政紀実録という書名が挙げられているけれども、宣統政紀は実録と同体裁とはいえず、政紀と称して実録とは言わない。先年台湾で華文書局が「大清歷朝実録」を影印した際に勝手につけた書名に誤まらされたのである。

そのあと約百七十頁は附録で、先ず各年毎の軍機大臣年表を、清史稿の年表に依拠したうえ呉考銘の枢垣題銘や梁章鉅の枢垣記略を参照して作り、大臣各人の籍貫、本職および主要兼職と記事を記入している。次に軍機大臣各人の出身と就任前における六部堂官の官歴の表があり、第三に前に軍機章京であつて軍機大臣に任ぜられた者の人物表がある。こうし

た表は頗る便利であるが、その製作の労力は並々ならぬもので、傳氏の勞を多としたい。

以上大体紹介してきたが、本書は書名にみられる通り軍機処の組織と職掌を主に論じた制度史的な研究である。とくにいろいろの角度から統計的に分析して研究された点に特色があるといえる。著者はもともとと政治学を専攻したのであるうか、その関心は制度自体にあるように思われるが、何しろ軍機処は約百八十年も続いた制度である。その間における実質的な変化や、現実の政治の動きとの関連など、歴史的になおきめ細く且つ動態的に究明しなければならないことは言うまでもない。しかしそれは今後の課題であつて、先ず本書の出現に敬意を表したい。

(一九六七年十月 嘉新水泥公司文化基金会刊 六九四頁)

アラスデア・ラム著

マクマホン・ライン (上下二巻)

——インド・中国・チベット三国關係

史研究 (一九〇四—一九一四)

中井英基

一

一九五九年三月、所謂チベットの叛乱及びダライ・ラマの

インド亡命事件が勃発し、同年一〇月にこれら事件が「チベット問題」として国連総会で取り上げられたことは、周知のことであろう。またこれら事件を契機に急速に冷却した中国・インド両国の関係が、国境問題をめぐってますます対立を深めて、遂に六二年九月から約二カ月間にわたる武力衝突という非常事態にまで至ったことも、まだ我々の記憶に新たなことであろう。これら一連の事件の結果、インドの「非同盟政策」の動搖、或はアジア政局における「フランス・オブ・パワー」の微妙な変化などが生じて、国際政治上の重要問題として大いに論じられたが、それと同時にこれら諸問題の直接の契機となった「チベット問題」や中印国境紛争に対しても識者の強い関心が寄せられた。そして時局解説の類のものや、国際法、政治学などの種々様々な分野や視角からする検討がこれまで枚挙の遑がない程に試みられてきたのである。然しながら、全体の傾向として英中蔵三国の歴史的関係の実態の詳細な分析説明がほとんど試みられないままに、表面的、形式的な法律論が横行していたのが実状であった。^(註)然るに、かかる傾向を打破すべく、一方で最近の中印国境紛争やチベット問題などの現実の諸問題を踏まえながら、他方で英中蔵三国の国際関係の史的究明を試みた研究書が最近現われた。それが以下に紹介するラム氏著の「マクマホン・ライン」である。

(註) チベット問題及び中印国境紛争に関する外国文の

批評と紹介 中井

論文・研究書は、ラム氏の『The China-India Border and McMahon Line の Bibliography に精しく挙げられているので、以下邦語の主なもののみを記しておく。(一) 川田侃「中印国境紛争の経緯と問題点」(『国際問題』三五号、一九六三年)、(二) 小幡操「中印紛争と国際関係」(前掲書)、(三) 入江啓四郎「中・印紛争と国際法」(昭和三十九年、成文堂)、(四) 長沢和俊「チベット」(昭和三十九年、校倉書房)、(五) 安藤仁介「中・印国境紛争と国際法」(京大教養部『政法論集』、一九六七年)

二

本書の著者ラム氏は、一九三〇年満州のハルビンで生れた。その後、イギリスのハロー校を経てケンブリッジのトリニティ大学に入り、史学を専攻した。卒業後、八年間マラー大学で教鞭を取っていたが、一九六四年オーストラリア国立大学附属研究所の研究員となり、更に現在はりイズ大学の歴史学講師となっている。彼はこれまでイギリス側の史料を基として主にイギリスの対チベット・中国政策の推移やチベットをめぐる国際関係史について八篇の論文と二冊の著書を著している。彼の初めの著書『Britain and Chinese Central Asia: the road to Lhasa, 1767 to 1905』, London, 1960 は、ボーグル使節の入蔵からヤングハズバンドのラサ遠征の

時までの、チベットをめぐる中印關係史を論じたものである。第二の書「The China-India Board—the origins of the disputed boundaries,」London, 1964 は、小冊子ながらも最近の中印国境紛争における問題の所在を歴史的に要領よく解き明かした概説書である。そしてここに紹介する第三の著書「マクホン・ライン」は、ヤングハズバンドのラサ遠征以後一〇年間の中英蔵三国間の關係を説明せんと試みたもので、いわば第一の書の続篇ともいふべきものであり、内容的には一部分第二の書とも重複している。本研究書の依拠する史料は、前二書と同じくイギリス外務省及びインド省の文書館中の公・私文書であるが、本書では特に一九六四年に初めて一般閱覧の許されたばかりのシムラ会議（一九三一一四）に関する貴重な史料が充分に利用検討されている。従つて、史料上の本書の価値は何よりもそこにある、と言えよう。

本書は上下二巻に分れて、次に示す二七章と附録（条約その他二〇篇）、資料文献目録、索引、地図二葉から構成されている。

一、上巻「モーリ、ミントーと対チベット不干渉主義」

第一部「新しい対チベット政策の摸索（一九〇四—一九

〇六）」

第一章 序言

第二章 パンチェン・ラマのインド訪問

第三章 中国のラサ条約承認とチベット側賠償金の第

一回支払い

第四章 モーリの見事な消極策とチベット旅行者の問

題

第二部「チベットに関する英露条約（一九〇六—一九〇

七）」

第五章 準備

第六章 交渉

第七章 締結

第三部「中国の積極策（一九〇五—一九一一）」

第八章 清朝末期の対中央アジア政策

第九章 張蔭棠の挑戦

第一〇章 一九〇八年のチベット通商協定

第十一章 張蔭棠とヒマラヤ諸国

第十二章 ダライ・ラマのラサ帰還

第十三章 趙爾豐のラサ進出

第十四章 ダライ・ラマ、ネパール、チベット商務

官、その他諸問題

第十五章 結論

二、下巻「ハーディング、マクマホン、シムラ会議」

第一部「アッサム・ヒマラヤ地域の危機（一九一〇—一

九一二）」

第十六章 一九一〇—一九一一年における中国の動向とチベット、ビルマ、ヒマラヤ諸国

第十七章 アッサム・ヒマラヤ地域の国境問題の背景

第十八章 アッサム地域の国境危機（一九一〇—一九一二年）

第二部「イギリスの政策とチベットにおける辛亥革命（一九二一—一九三二）」

第十九章 中国の中央チベット支配の喪失（一九二一年一月—一九三三年四月）

第二〇章 中国の反応

第二一章 イギリスの反応

第三部「シムラ会議とマクマホン・ライン（一九三二—一九四一）」

第二二章 シムラ会議への中国の参加受諾

第二三章 第一回シムラ会議（一九三二年一月—一九三四年一月）

第二四章 最初のシムラ条約（一九三四年四月—七月）

第二五章 第二回シムラ条約（一九三四年七月—三月）

第二六章 マクマホン・ライン

第二七章 結論

本書は、現代チベットの運命を決定したと著者がみなす一九〇四年から一九四一年までの一〇年間を扱っているが、この期間においてイギリスが対チベット・ロシア・中国の交渉を通

批評と紹介 中井

じて得られた主要なものは、マクマホン・ラインの画定であり、この意味でマクマホン・ラインはこの期間におけるイギリス外交の象徴であった、としている。次にこのマクマホン・ラインの成立過程を二期に分けて、前期（一九〇四—一九一二年）は、ヤングハズバンド遠征軍の引揚げた後に残したチベットの「政治的真空状態」を中国が満たしてチベット支配を試みた時期、次に後期（一九二一—一九四一）は、辛亥革命によってチベットにおける中国の支配体制が崩壊した後、そこに生じた新しい「政治的真空状態」をイギリスが利用してマクマホン・ラインの画定に成功した時期、と各々概観している。本書の上巻はこの前期を扱い、下巻は後期を論じている。

以上の構成からも知れるように、本書はわずか一〇年間を取り扱ってはいても、内容的に極めてヴォリュームのある研究であって、新しい事実や新しい見解を随所に展開している。然し、それらすべてをここで網羅して指摘することは紙幅が許さないので、以下各部毎に大意を要約して紹介し、その後に若干の感想を記したいと思う。

まず、上巻の第一部は、一九〇四年以後のイギリスの対チベット政策の基本方針と具体的な展開過程を四章にわたって跡づけている。ここで特に論じているのは、次の諸点である。（一）遠征軍のラサ派遣及びラサ条約締結というインド総督カーゾン卿の積極策は、チベットに対して直接的に働きかけるこ

とよつてのみ英藏關係の打開とロシア勢力のチベット滲透の阻止が得られるとの考えに基づいていた。然し、イギリス本国の保守党政府は、ロシア、中国に対して消極策を取っていて、カーゾン卿の先の見解と行動に反対であり、(イ)中国全權大使唐氏とのカルカッタ交渉(一九〇五)及び北京交渉(一九〇六年一月)を経た結果の修正ラサ条約の批准(中英北京条約、一九〇六年四月)、(ロ)ロシアを牽制する目的のインド軍チベット駐屯計画の中止及びギャンツェ駐在の英商務官の行動の自粛、の二つを通じて中国、ロシア両国に譲歩して、ヤングハズバンド遠征によつて得られた諸權益を自から放棄した。(三)また一九〇五年二月本国に成立した自由党内閣のインド担当國務大臣モリー卿は、一方で対ロシア協調主義を取つて、本国政府間のトップ交渉を通じてインド辺境問題を処理しようとし、他方でかかる英露交渉に基づきヨーロッパ諸勢力からのチベットの中立化を図ることで、中国勢力のチベット進出のないことを期待した。(四)以後一九一一年まで、かかる樂觀的な対ロシア・中国觀に基づくモリー卿の「見事な消極策」が対チベット政策の基調となつた。

次に、第二部は両国間の緊張を和らげるべく一九〇六年ベテルスブルグで開かれた英露會議を三章にわたつて論じている。ここでは次の諸点が特に新しい。(一)この會議を通じて両国は(イ)諸外国勢力からのチベットの完全な中立化と(ロ)チベッ

トに対する中国の「宗主權」の二つを承認し合ひ、一九〇六年これを英露條約として締結したが、イギリスが中国の「宗主權」を認めてこれを公式文書中に明記したのはこの時が初めてであつた。(二)然し、この場合かかる中国の「宗主權」の下にあつてもなお且つチベットは高度の自治を享受し、国境・通商等について中国の仲介・許可を経ない独自の外交權を有すると解されているので、一九〇五年以来中国側が主張する、チベットが中国本土の省並みに扱われる内容の「主權」という語と意味内容の上で大きなへだたりがあつた。(三)この會議で、イギリスは問題の本質上本来表裏一体の關係にあるモンゴルとチベットを切り離して、唯チベット問題のみを議題とし、モンゴルに対するロシアの行動範圍を限定しなかつた。そのため締結された條約は、以後イギリスのみを一方的に制約し、外交上の大きな負担となつた。

さて、中国は以上の如き消極的なイギリスと全く対照的に、チベットを嚴重な統制下に置くべく積極的に対チベット工作に乗り出してゐた。一九〇五年から一一年までの中国の対チベット政策を跡づけたのが、次の第三部である。ここでは八章にわたつて次の諸点を明らかにしている。(一)この時期の清朝の対チベット政策の基本は、(イ)四川省方面からの直接的武力によるチベットの直轄化計画の推進、と(ロ)中国人官僚の指導によるチベットの改革の二つであつた。(二)先ず(イ)の方針に

即して、四川建昌道臺（一九〇六年七月より川滇邊務大臣）の趙爾豐は一九〇五年チベット民族の抵抗を武力によって鎮圧しながらチベット東部のカム地方の経略を開始した。また彼は中央チベットでの中国側の工作を援護すべく近代式裝備の中国兵二千を首都ラサに進撃させた。(三)次に(四)の方針として、一九〇六年駐藏大臣に任命された張蔭棠はカルカッタ經由の海上ルートでチベットに入り、中国の支配権の強化とチベットやヒマラヤ諸国に残存するイギリスの影響力や威信の完全な一掃を図って、行政、外交両面で精力的に活躍してかなりの成果を収めた。(四)また中国は一八九三年締結のチベット通商条約の改正をイギリスに要求し、一九〇七年八月シムラにおいて中英蔵三者會議を開催させて、条約の改正の外にチベットには独自の外交権がない旨を一九〇八年四月締結の条約文中に明記させることにも成功した。(五)一九〇四年以後各地を転々と移りながらロシア、アメリカ、イギリス等の援助を得べく外交折衝を行っていた第一三世ダライ・ラマは、何の成果を得られないままに中国の指示に従つて一九〇九年二月ラサに帰還した。然し彼にはすでに実権はなく、このままでは中国の傀儡となるのが必定であつたので、先述の四川軍がラサに到着した一九一〇年二月にインドに亡命した。中国の対チベット政策は、このように着々と成果を収めつつあつたが、然しながら、一九一一年一〇月に勃発した辛亥

革命を境に情勢は一変した。本書の下巻の第一部は、辛亥革命前後の時期のアッサム・ヒマラヤ地域における英中關係を論じている。ここで特に指摘しているのは、次の諸点である。(一)中国の対チベット工作のうち、(イ)中央チベットでは親中国派の傀儡政権が立てられ、中国語教育の学校設置や郵便・電報制度等の近代化計画が実施され始めた。また(ロ)東部カム地方では一九一一年四川省總督となつた趙爾豐が強引に「西康省」を設定し、この地方の直轄化計画を続行していった。(二)然るに、中国勢力がチベットに以上の如く定着していった結果、未だ国境が明確に画定されていないアッサム・ヒマラヤ地域にもその余波が及び、インド政庁をしてこの方面にも中国勢力の滲透の意図有り、との危機感を抱かしむるに至つた。(三)ところで、一九一〇年までのアッサム地方におけるイギリス側の国境線は、ヒマラヤ山脈の南麓に沿つた暫定的な統轄境界線の所謂「アウター・ライン」であつたが、チベット辺境への支配徹底を目的とするアッサム地方での中国軍の活発な動きやそれまで十数年続いてきた中国の雲南省と英領ビルマとの国境紛争などによつて一層危機感をあおられたインド政庁（一九一〇年一月より總督はハーディング卿）は、一九一一年三月に起きたアッサム原住民による英人殺害事件を機会に、後の所謂マクマホン・ラインには近い新しい「アウター・ライン」を旧ラインよりもずっと北方に設定

し(一九二一年九月)、将来予想される中国との国境交渉に備えた。(4)この新「アウター・ライン」設定以後、イギリス本国政府は、現地で中国勢力と相對持し態度を硬化させているインド政庁に引きづられて、従来の「不干渉主義」を棄てて對チベット政策をより積極的な方向へと轉換させざるをえなくなった。

次に第二部は、チベットへの辛亥革命の影響と革命後の中華民国、イギリス両者の對チベット政策を三章にわたって跡づけている。ここでは、次の諸点が明らかにされている。(1)革命直後、中央チベットでは反中国派のチベット人が中国兵と戦闘を開始したが、裝備の点で全く劣るチベット側は苦戦を続けた。然し、一九二二年八月ネパールの仲裁で両者の間に停戦が成立し、翌一三年四月までに中国軍はインド經由で撤退した。以後、中国の支配の手は一九五一年まで全く中央チベットに及ばなかった。(2)また東部カム地方では、これまでチベット直轄化工作を推進してきた趙爾豐が部下によって殺害されたことと、チベット人の反中国叛乱が各地に頻発したことにより、この方面での對チベット工作も一頓座をきたした。(3)然るに、民国政府は革命による混乱を收拾しながら、チベットに対して一方では「五族協和」を呼びかけて、これまでの異民族支配の終了と各民族の自発的參加協力に基づく連邦國家樹立の夢を提示し、他方でチベットに対する実

質的な支配を復活すべく再び四川省から軍事的圧力をかけ始めた。(4)インドに亡命していたダライ・ラマはイギリスの支持を得られないままに一九二二年七月チベットに帰国したが、中国・ロシア両勢力からのチベットの中立化を望むイギリスとしては、チベットへの中国の軍事的圧力を排除し、且つダライ・ラマとロシアとの秘密交渉を未然に阻止するために早急にも何らかの処置が必要となった。然るに、当時外蒙古を影響下に収め、なお且つ新疆、アフガニスタン、ペルシヤ等にも触手を延ばしていたロシアへの対策について、インド北辺防衛のみを重視するインド政庁とヨーロッパやアジアの他の地域をも考慮に入れている本国政府とは全く対立していた。結局、双方の妥協案として、中国に外交上の圧力を加えて、チベットの中国からの中立化と中国を経由しない英蔵兩國間の直接交渉権を中国に承認させるべく、一九二二年八月英公使ジョルダンが「覚え書き」を袁世凱政府に渡した。然し、中国側は当初これを無視した。

さて、第三部は六章から成っていて、イギリスがシムラ会議を通じてアッサム地方の防禦線たるマクマホン・ラインを画定した過程を論じている。ここで特に明らかにしたのは、次の諸点である。(1)イギリスは先の「覚え書き」を中国に承認せしむることに失敗した後、方針を変えて中英蔵三者會議をインド内(即ち、インド政庁の意向を反映しうる地域内)

で開催すべく中国を説得、或は威嚇して遂に一九一三年六月最終的に会議開催に同意させた。(一)一九一三年一〇月、陳貽範、マクマホン、シャトラ各々三国代表が集まり、所謂シムラ會議が開始されたが、その間チベットのカム地方では、英蔵両国の反対にもかかわらず既成事実を積み上げるために中国軍の活発な軍事活動が続行されていた。(二)會議における中蔵両者の主な意見の対立は、両者の政治的關係、即ちチベットは中国の従属国か或は独立国か、の問題を内にはらむ境界線設定にあり、この点についてマクマホン卿の示した内外チベット分割案も中国の入れるところとならず、一九一四年四月シムラ條約は略式署名を得ても正式調印はされなかった。(三)然し、イギリスはこの間にチベットと直接交渉をして、マクマホン・ラインと印蔵新通商條約(印蔵貿易の促進と英駐在官の活動範圍の拡大を目的とする)の二つをチベット側に承認させた。(四)またイギリスは、モンゴルに対するロシアの權益承認と引き換えにチベットに対するイギリスの特權を承認せしめようとして、シムラ會議と並行して一九一四年二月からロシアの意向を打診したが、ヨーロッパ情勢の險惡化のために結局六月この方面での交渉は実を結ばないで延期となった。(五)以上の如きシムラ會議を通じて、イギリスはアッサム地方の國境としてのマクマホン・ラインを得たが、然しこのラインの設定は、従来チベットの支配下或は影響下にあつ

た地域を暫定的、試験的に英領に併合したものであり、しかもライン設定後も例えばタワン地区は一九四七年までチベットの實質的な支配下にあつた。従つて、マクマホン・ラインそのものは國際法的に何の根拠も効力もないものであつた。またこの會議においてもイギリスは、國際法上におけるチベットの地位を改善することが出来なかつたので、これ以後チベットは事實上(de facto)自主獨立の状態を享受していたが、法理上(de jure)あくまでも中国の宗主權の下に留め置かれた。即ち、この時期におけるイギリスのアジア外交の一つの頂点であるシムラ會議は、國際法上でのチベットの地位改善とアッサム地方の國境線画定の二つの問題を真に解決したものではなかつたが、ここにこそ実は現代のチベット問題及び中印國境紛争の根があつたのである。

三

以上、本書の中から新事実や新見解の幾つかを摘記したが、勿論これらの外にも著者は多くの重要問題を指摘、解明している。また本書には、中印國境紛争やチベット問題に関する従来多くの研究書に見られた党派的な立場に基づく一方的な主張、解釈の如きは全くみられない。著者はあくまでイギリス側史料に関する限りでの客觀的根拠に依拠しつつ、慎重且つ穩健に敘述を進めている。更に本書の随所に多くの

地図がはさまれているし、巻末の附録に納められているチベット関係の条約集にも行き届いた配慮がなされている。この点、これら地図や条約集は読者の理解を大いに助けているし、またこの分野の研究のよき参考資料ともなるであろう。言うまでもなく、本書に示された新事実や新見解の中には、改めて検討されるべきものも少なくはないであろう。然しながら、本書はこれまで全く見ることの出来なかったイギリス側の老大な公・私文書を渉猟し、それら史料を整理検討して得られた結論に基づく限りにおいて、イギリスの対チベット政策の立案から実施の経過、対ロシア・中国との交渉の過程をほぼ究明して、従来の中英蔵三国関係史研究を一步大きく前進させた点、大きな意義を持つ貴重な労作である、と言えよう。

ところで、国際間におけるチベットの地位について本書は具体的な実態は如何にあったか、という点よりもむしろ事実如何にかかわらず法理上如何にあったか、という点を重要視する所謂「法理主義」の立場を最終的には取っている。然しながら、この点に関して、本書にも他のほとんどの書と同様の疑問が感じられる。というのは、チベットと中国・イギリスとの間に締結された諸条約は、周知のように双方が対等の立場に立ちお互いの合意の上でなされたものでは決してなく、それら大国や帝国主義国が自国の利害にのみ立つて武力や外交的威嚇、策略によってチベットに無理やりに押しつけ

締結させたものであった。また中国、イギリス、ロシア等の間で締結されたチベット関係の条約も、国際間におけるチベットの客観的な地位や状態を反映させることなしに、ただ単に所謂「獅子の分け前」としてお互いに取引し、妥協した産物にすぎない。従って、かかる弱肉強食の原則に立つ国際政治の場において結ばれる国際条約の持つ「暴力的」な側面が看過される限り、国際関係論や国際関係史研究は、単なる国際条約の合法性有無の問題にのみ矮小化される危険があると言えよう。またかかる国際関係の研究や法律論からは、弱少民族が大国や異民族の支配・搾取の下で如何に呻吟し続けてきたか、また外国勢力や異民族に対して如何なる抵抗運動を展開して、その支配の下から自からを解放していったのか、という民族の問題や民族解放運動を正しく認識しようとする志向する視角は出てこないであろう。チベットをめぐる国際関係史の今後の方向としては、チベット民族固有の発展の裡に照して、単なる形式的、表面的な法律論に陥ることなく各時期における諸外国との政治的、経済的、文化的諸関係の具体像を分析説明し、その上で改めて近代法的な諸概念で総合的に把握し直す途が真剣に摸索されねばならない。また何故モンゴルでたとえ部分的にはあれ、民族独立が実現し、チベットで実現しなかったか、という両民族におけるナショナリズムのあり方の差異の問題も検討されねばならないだろ

う。かかる意味からしても、「第三世ダライ・ラマ伝」や「パンチェン・ラマ伝」などのチベット史料が何よりも先ずかかる問題に関する根本史料として検討されねばならないのではなからうか。

(Alastair Lamb; *The McMahon Line—a study in the relations between India, China and Tibet, 1904 to 1914*, London, 1966, 2 vols., vol. I, pp. xi+267+xx, vol. II, pp. vii+386+xx.) (一九六八・五・二八)

キシヨリ＝サラシ＝ラール著

サルタナットのたそがれ

加藤 和 秀

一

K＝シ＝ラール氏は、一九二〇年生れで、一九三九年にアラバード大学を卒業、一九四五年には、博士号を得ている。現在はポーパルのガヴァーメント＝ハミディア＝カレッジの歴史学教授であり、一九五八年には、インド歴史学会の中世史部会のリーダーとして活躍している。数少ないインド中世史研究者の中にあつて、最も優れた業績をあげている一人

批評と紹介 加藤

である。その専攻は、主にデリー＝サルタナット期の政治史、社会文化史であるが、我が国に於いては、すでにその代表的著書「ハルジー朝の歴史」(*History of the Khaljis, The Indian Press, Allahabad, 1950*)によって彼の名はある程度知れ渡っている。この著書は、デリー＝サルタナットの最盛期を築きあげたハルジー朝を扱ったものであつたが、最近の彼の研究は、デリー＝サルタナット末期に向けられていたようであり、その成果がここで紹介する、「サルタナットのたそがれ」(*Twilight of the Sultanate, APH, 1963*)とつづきにされた訳である。

本書がとりあげるのは、トゥグルク朝末期のティームールの侵入からバーブルの征服までの約一世紀と四分の一に渡る期間(1398～1526 A.D.)の政治史及び社会文化史である。著者は、ほぼ十五世紀に重なるこの時期が、政治的にも、社会的・文化的にも、それ以前とは異つた特色を有すると主張する。この見解は従来の研究には見られなかったもので、注目に値する。

著者が強調するのは、第一に、「確かに恐ろしい災難として認められるティームールの侵入には良い面もあった。それは、ヒンドゥー教徒とイスラム教徒とに、外敵に対して共に立ち向うことを教えた。結合の衝動は時がたつにつれてたかまり、十五世紀から十六世紀にかけて現われた社会＝宗教改